

# 日本国と仏教

第2次世界大戦の前後において、日本自体大きく変貌してきたが、仏教界に於いても大きな変化があり、それを考察していきます。

まず簡単に仏教の歴史を紐解いていくと、インドで生れ中国に伝播し、遣隋使や遣唐使らによって日本に伝播してきました。日本に伝わった時の仏教は、学問として学び国の行く末を占う呪術的な要素が強くありました。その後時代が進み、鎌倉時代に新興宗教である、浄土宗を始めとした民衆仏教が誕生したのです。その後の仏教は、全ての人が平等に教えを受けられるようになっていきましたが、徳川幕府による江戸時代に入ると、各寺院の様相が変わっていきます。1615年7月に浄土宗諸法度35箇条が幕府より下され、これが江戸時代を通して根本法規となったそうです。その中に檀家制度というものがあり、その地域に住むものはそこにあるお寺の檀家にならなければいけないという制度で、戸籍の管理、隠れキリシタンかどうかを調べるため、毎月の月命日に各家々をお参り

# 日本国と仏教

する等、民衆の監視を目的とした役所的な役割も担ってきました。これにより一部の寺院とは、かなりの資産を持つようになり、金貸しや売春、賭博などが行われていました。このような事があった事から（坊主丸儲け等）の言葉が生まれたと言われております。他にも要因はあったと思いますが。このような事が萩でもあったのか調べましたが、分かりませんでした。

それともう一つに戦国時代からキリスト教の宣教師が日本に来て布教活動を各地で行っていきます。この事に対して、仏教各宗派の反応というものがあまりなく、どのような思いだったのかはよく分かっておりませんが、間違いなく不愉快極まりなかった事だろうと思います。戦国時代においてはそんなことよりもという感情もあったと思います。それが徳川幕府の時代になると、キリスト教は排除されていき、仏教は神道と同列に扱われるようになっていきました。

# 日本国と仏教

これが明治期に入ると様相が一変してきます。この萩から始まった維新の波は、王政復古、天皇中心の政治という流れになり、また西洋文化を積極的に受け入れ、そこにはキリスト教の布教も積極的に行えるようになりました。そこで神道を国の国教にする動きが出てきました。それで神仏分離、廃仏毀釈を声高に叫ばれるようになり、全国各地の寺院は大なり小なり影響がありました。ちなみにこの梅藏院もお稲荷様をお祭りしておりましたが、明治8年近所にある多越神社に合祀されました。

ちなみに神仏分離、廃仏毀釈を収束させる道筋を付けたのは、幕末の志士として活躍された萩藩の、広沢真臣（ひろさわ さねおみ）という方でした。

明治期に入り大日本帝国憲法が明治22年に公布され仏教界にとって、ここに来てようやく権力から離れて宗教独自の道を歩める時代になったと言えます。

# 日本国と仏教

そしてここからが本題ですが、明治後半から大正、昭和と日本は海外に目を向け、戦禍を広げていきます。

最初に海外の勢力と戦争をしたのは、文禄、慶長の役ですが、その辺りは割愛しまして、明治27年の日清戦争から日露戦争です。この戦争の大きな理由の一つとして、朝鮮半島の独立と清国とロシア帝国の脅威からとされており、他にも朝鮮半島を緩衝地帯として日本側に置く意味もあるそうです。その日清戦争後、日本は朝鮮半島を併合し、台湾を清国から割譲を受けてこれを統治します。ここで重要になったのが現地の人々でした。

色々な政策を施していく中で、日本の仏教と朝鮮半島や台湾に昔からある仏教と重ねて日本から布教が出来る僧侶をかなりの人数連れて来たと言われていると記録されています。

この目的は日本文化を学ばば西欧諸国のような侵略者とは違おうと分かってもらえるという考えから始まったと言われておりますが、それぞれ現地の人々は

# 日本国と仏教

その日本の仏教を信じていると言えば生活の保障につながると解釈をしていたと記録が残っておりました。この日本仏教を利用した背景には、イギリスやスペイン、フランスからアジア全域に送り込まれてきた宣教師の存在がありました。宣教師は各地に行くと、教会や学校、病院などを建設し現地の人々から親しまれていました。それを真似て行われたという事です。

この政策は昭和 12・13 年頃までは安定して機能していきました。次第に国際社会から孤立していき、先日の遊史会で梶本さんがお話しておられたように、米英に宣戦布告を行い大東亜戦争、太平洋戦争など名称はありますが、大戦が起こってきたのです。戦争の経緯や時系列は割愛いたしますが、日本が占領下においていった各地には大小ありますが、寺院や神社を建立し、現地の人々に対して、日本文化を広めていたそうです。また私の祖父も所属していた宗教宣撫班という部隊が、東南アジア戦線のビルマ（現ミャンマー）に侵攻作戦に動員されました。

# 日本国と仏教

祖父はあまりこの事について話をしてくれることはありませんでしたが、毎日仲間の葬儀をして身元が判る物を集めたと言っておりました。それを帰国後に遺族の元に持って行ったと言っておりました。

また十数年前にサイパンに行ったことがあります。そこには南洋寺という浄土宗のお寺の跡地がありまして、今は門扉の土台だけが残っている状態で、戦争の激しさを今に伝えておりました。

戦後、移民政策と言うものが出され、ハワイや南米に日本人が多数移民していきました。それに伴い各宗派も、各国に僧侶を派遣して布教を行っております。

## 浄土宗南米開教区の歴史

浄土宗は、海外での開教を明治31年（1898）に制度化、現在世界4カ国（アメリカ、ブラジル、オーストラリア、フランス）に拠点を置き、開教活動を行っている。

# 日本国と仏教

ブラジルで開教活動を行う南米開教区は、昭和29年（1954）に浄土宗の特命開教使で、後に同開教区初代開教総監となった長谷川良信（はせがわりょうしん）師を派遣し、サンパウロで活動したことに始まる。同師は「宗教・教育・福祉の三位一体」を基本理念とし、日本語学校なども運営。

昭和28（1953）年、単身で第1次ブラジル渡航。南米浄土宗別院日伯寺創建。昭和32（1957）年、佐々木陽明（ささきようめい）21歳をともない第2次ブラジル渡航。日伯字学園開設、知的障害児施設イタケーラ子供の園（現・こどものその）を開設。

2代開教総監・佐々木陽明師は、養老ホームを建設するなど、開教活動を進めるとともに社会福祉活動にも力を注いだ。

そして、その方針は第2代・佐々木陽明前総監から、第3代・佐々木良法（ささきりょうほう）現総

# 日本国と仏教

監へと引き継がれ今日に至っている。佐々木良法は陽明の長男であり、ブラジル生まれブラジル育ちの日系ブラジル人2世。

現在、ブラジル国内には、南米浄土宗別院日につ伯ぱく寺（サンパウロ州サンパウロ）、マリンガ日伯寺（パラナ州マリンガ）、イビウーナ日伯寺（サンパウロ州イビウーナ）、クリチーバ日伯寺（パラナ州クリチーバ）の4カ寺が存在し、5名の浄土宗開教使（開教活動に従事する浄土宗僧侶）が所属している。

そのうち、クリチーバ日伯寺は平成20年（2008）に、一軒の借家に本尊を安置し始まり、開教使らの地道な活動により信徒を増やし、平成30年（2018）に営んだ五重相伝会（浄土宗の奥義を授ける法要）の受者から、開教使を志す人物が生まれるなど、ブラジル南部地域の念仏道場として発展してきた。

# 日本国と仏教

令和6（2024）年8月24日、浄土宗開宗850年慶讃法要が南米浄土宗別院日伯寺で営まれた。

法要には、開教区の信徒ら約90名が参加。佐々木総監を導師に法要が営まれ、法然上人が浄土宗を開くきっかけとなった「開宗の文」を奉読し、上人の遺徳を讃えた。

同日には、出家して僧となる儀式である得度式が営まれ、マリンガ日伯寺（パラナ州マリンガ）1名、クリチーバ日伯寺（パラナ州クリチバ）3名の信徒が得度を受式。

浄土宗が開かれてから850年が経ち、南米の地にお念仏の教えが伝わって70年が過ぎた。その記念すべき年に4名の信徒が僧侶の道を志してくれたように、南米の地で確かに浄土宗の教えが根付いている。これまでの開教活動は日系人中心であったが、広くブラジル人へ向けての開教が今求められている。

# 日本国と仏教

※初代 長谷川良信 昭和41（1966）年8月4日  
遷化。遺骨は分骨され、海を越えたサンパウロの日  
伯寺へも埋葬されている。75歳。

※二代 佐々木陽明 令和元（2019）年7月18  
日ブラジルにて遷化。83歳

浄土宗の現在の海外にある寺院

ハワイ 13ヶ寺

北米 2ヶ寺

南米 4ヶ寺 関連施設2ヶ所

オーストラリア 1ヶ寺

フランス 1ヶ寺